

平成27年度 事業実績報告書

社会福祉法人 椎原寿恵会

佐賀事業部

<特別養護老人ホーム 真心の園>

・ユニットケアへ移行し丸2年が経過した平成27年度は、入居者の高齢化・重度化による死亡退居者・長期入院による退居者が増加し、また平成27年4月より原則要介護3以上しか入居できなくなったことによる実待機者の減少もあり、新規入居者の獲得に年間を通して苦戦した1年であった。また介護課・医務課の人員不足、施設全体としての管理体制の弱さが表面化し、その対策に追われる1年でもあった。各職員個人の能力・裁量だけに任せるのではなく、施設全体として情報を共有し、状況を分析し、協力しあって管理していく体制作りが必要であると、特に下半期は管理体制の基礎固めを実施してきた。平成28年度は各役職・各職種・各職員それぞれが役割を再認識し、またその役割を全うしていくことで、新規入居者の獲得・既存サービスの質の向上へとつなげていきたい。

<真心の園ショートステイ>

・行事などの活動予定や空き状況を関係機関に配布するなど利用者獲得に向けた取り組みは実施してきたが、実績としては多くの月で前年度実績を下回る結果となった。特に平日の利用者減が顕著であり10名以下の日も多くみられた。利用者獲得の為、平日の行事や活動内容を充実させる計画も試みたが、スケジュール調整に時間がかかるなどし実際の配布時期が遅くなり、利用者獲得に大きくむすびつけることができなかった。来年度は2ヶ月先のスケジュールを配布できる体制を整え実施していきたい。また他の在宅支援サービス・家族との連携・調整にも課題が残っており、ショートステイは在宅支援サービスであることの再認識を含め、在宅サービスとしての質の向上にもつなげていきたい。

<デイサービス事業>

・担当者会議や各事業所訪問時はPRを兼ね空き状況を伝え、利用者獲得に務めた。又利用日の変更及び追加、緊急利用等柔軟に対応し受け入れを行う事ができた。

・重度者や認知症の方を受け入れるにあたり、職員個人及び事業所全体の向上を図る為に外部研修への積極的な参加、内部研修（研修報告含む）やミーティングを実施した。

<訪問入浴サービス事業>

・利用者の状況把握や家族、主治医、ケアマネージャー等との情報共有により、安全安心な入浴の提供ができた。

・終末期の利用者も多くニーズもあることから今後も質の高いサービス提供できるように努める。

<ホームヘルパー事業>

・ケアマネージャーやご家族と密に連絡を取り情報の共有化を図る事で、利用者が安心して在宅

生活が送れるように支援を行った。

- ・第1居宅・第2居宅間の定例会議やミーティングを通し情報共有や個々の資質向上に努めていく。
- ・内外部研修に積極的に参加し、個々の技術の向上ができるよう務めた。

<居宅介護支援事業>

- ・包括支援センターや医療機関（連携室）との連携を図る事で、利用者を獲得することができた。
- ・研修にも積極的に参加したことで、新しい情報を得、スキルアップができた。

<給食サービス事業>

- ・前年度に比べ、利用総数は横ばい状態にあるも、地域別では、鳥栖地区が配食数・世帯数共に減少傾向にあり、みやき地区においては配食数・世帯数共に増加している。鳥栖地区では利用頻度の制限が厳しい状況にあり、急激な向上は見込めない状況にある。
- ・特に問題もなく、安心・安全に心がけ、配食時の安否確認・利用者の個別対応・食中毒感染予防に努めた。

<鳥栖市鳥栖西地区地域包括支援センター>

平成22年度より、鳥栖地区広域市町村圏組合より委託を受け6年を迎えた。

これまで同様、各町の班長会や一人暮らしの方の会食会など地域の中に出向き、高齢者の総合相談窓口としての地域包括支援センターの役割を伝えてきた。また、認知症サポーター養成講座や介護保険制度改正、口腔ケア等についての出前講座を実施した。

総合相談支援や権利擁護業務の相談実績件数も多く、地域包括支援センターが地域に浸透してきた結果と思われる。

平成29年4月から新たに介護予防・日常生活支援総合事業がスタートし、地域の実情に応じて、地域住民などの様々な主体による多様なサービスが開始される。それに伴う包括支援センターの役割も大きく、制度内容を十分に理解し、関係機関と密に連携を取りながら、新体制へスムーズに移行できるよう取り組んでいく。又、改めて地域の繋がりが求められる中で、地域包括支援センターがその一役を担い、地域の支え合いの体制づくりを推進すると共に、要支援者の方等に対する効果的かつ効率的な支援体制の確立を目指していく。

<訪問看護ステーション>

- ・徐々に訪問回数が増加しているが、1回訪問時間30分の依頼が多く、訪問件数が増加している反面収入の増加につながり難かった。
- ・定期的な病院訪問などはほとんど出来なかった為、病院からの新規利用者の紹介はほとんど無かったが、利用者主治医や担当ケアマネ、各種サービス事業所への情報提供等でケアマネからの新規の依頼は受けることが出来た。
- ・各疾患や各年齢、介護度の利用者があり、ステーション内外の研修の参加しスキルアップに努

めた、終末期の利用者や困難ケースの依頼も少しずつつながりがあった。

- ・24時間対応体制での活動の中で、在宅での看取りを行い、夜間の訪問で家族の安心が得られた。
- ・在宅生活の一環であるグループホームに対しても医療連携体制をとり、2施設4ユニットに対し、各施設週2回の訪問を行いながら健康管理に努め、主治医との連携が図れた。
- ・特養医務課のスタッフの急な退職により、施設内看護スタッフ補充対応のため、2月よりステーションを休止とする。

<ケアハウス花みず木>

・年度末において入居者数23名となりました。近年入居者の体調不良や状態低下があり平成25年度の平均介護度より0.2介護度上昇している。なるべく施設で生活を継続できるように、家族・医療機関・福祉との密な連携が図ってきたが、退居が重なり新規入居が追いつかない現状となった。新規入居者獲得に向け地域の機関やチラシの配布を行い、地域行事にも積極的に参加し花みず木のアピールを行ったが入居に至りませんでした。

・施設処遇面では現入居者のうち介護保険適用者が8割を占めており、入居者の体調面、精神面にも気を配り、入居者の声・訴えに耳を傾け、不安等の解消に努めた。

行事では、皆さまが参加できる環境を作り、又地域の方々との交流やイベント行事なども行った。

・入居者の方々が家族・医療機関・福祉との連携を密にとり、1日でも長く自立した生活ができるように支援に努めた。

<グループホーム和が家>

- ・主治医や看護師との連携により、利用者の体調管理や急変時の適切な対応に努めた。
- ・地域との関わりを深める為、夏休みのラジオ体操の際には子供クラブにグループホームの庭を開放し、地域の代表者などにグループホーム運営推進会議への参加していただく事ができた。
- ・利用者の入退居時に他事業所との連絡と調整を行い、また待機者の状況把握に努めた。

<グループホームみどりヶ丘>

・ユニットケアを実施し入居者ひとりひとりが自分らしく過ごす事ができるホーム作り、自立支援に努めた。

・月1回入居者が楽しめる行事を企画・実施する取り組みを行い、入居者はもとより職員も楽しんだ。

・平均介護度が低くなり歩行自立の方が増え、離設事故予防対策としてのケアを考えさせられた1年でもあった。

・保育園が隣接されている事を活かして、園内の散歩など日常的な子供とのふれあいで心身の活性化に努めた。

・ホーム内外の研修に参加し、職員の質の向上に努めた。

<みどりヶ丘保育園>

- ・延長保育、一時保育、休日保育と保護者の勤務時間のニーズに応えた保育を行ってきたが、休日保育については本年度より保護者負担が無料となり、利用者が急増した。(平成28年度からは本園のみとなった)
- ・支援センターは地域の子育て中の若いお母さん方に対し、遊びの広場、公民館の出前保育等において育児相談を実施。子育てに悩むお母さん方のよき相談相手となっている。
- ・発達障害が多くなり対応に苦慮しているところであるが、保護者との信頼関係を築き関係機関との連携を密にして早期療育に向けて努めてきた。
- ・麓刑務所慰問も3回目となり、地域交流を行う。

鹿児島事業部

<ケアハウスかせだ>

- ・平成28年3月31日現在の在籍数は、29名(単身25名 夫婦2組の入居者)となっております。
- ・高齢化による身体能力の低下により、退居者が8名と多かった。(他施設へ4名、入院4名)入居者構成で80歳代が半分を占め(平均年齢84.2歳)介護認定者21名となり、施設内訪問介護サービス利用者(10名 16回/週)や認知症デイサービス(8名 12回/週)有馬病院デイケア利用(7名 12回/週)が増えている現状です。又、入居者が敬老の日に南さつま市より”白寿のお祝い”を頂いたことは、他の入居者にとって大きな励みになりました。
- ・今後、利用者、家族、各関係機関等と連携を密に取りながら、入居者一人ひとりにあったサービスを提供していきます。

<デイサービス事業>

(デイサービス遊逢)

- ・面談によりスタッフ全員が自己の目標を掲げ、研修に参加し自己研鑽できたことで、認知症の人の困りごととは何か、家族支援とはなにかに気付き、スタッフ1人ひとりが自分で考えて行動できるようになった。認知症の進行や症状の悪化により、利用頻度が増える一方、短期入所の利用も増えた。PR不足による事業所の認知度不足から、新規利用者の獲得という課題が残った。

(デイサービス金峰やすらぎ館)

- ・平成27年度は、体験利用は6件、新規利用者契約数8件の実績でした。利用者の認知症状も様々で、前頭側頭型認知症の方等個別のかかわりが必要となっています。スタッフ間で症例別の研修を行い、安定したケアの提供で症状の緩和につながっております。今後も認知症対応型デイサービスの役割を地域の中で紹介しながら、安定した利用者確保につなげていきます。

<ホームヘルパー事業>

- ・利用者の増減については、要介護利用者が減少している。介護予防と障害福祉サービスの利用者が増加した。障害サービス利用者の入退院が実績に反映し、2月から入院され現在に至っている。
- ・派遣の中で、利用者の体調や日常生活での特変に対して、ケアマネや家族に報告してサービス変更等対応することができた。

<居宅介護支援事業>

- ・有馬病院相談員、法人内事業所、有料老人ホーム、他の居宅介護支援事業所との連携や認定調査時に居宅介護支援契約を行っていない方に制度の説明を行い、新規利用者の確保や当法人の訪問介護、デイサービスの利用者増加につなげることができた。
- ・今後も他介護支援専門員や小規模多機能事業所、有料老人ホーム、精神科病院と連携し、利用者増加につなげるようにしたい。

<かせだフレンドホーム>

年度中の入退所が1名しかいなかったが、高齢化や疾病の重度化により入院者の数や期間が増えたことで、満床を維持できた月が一度もなかった。一方、入院に対するカバーを通所生活介護でできたことで、大まかな減少には繋がらなかった。短期入所については、平均して安定した利用を確保できている。事業所の課題としては、上半期に直接処遇職員の人数による人員配置体制加算がⅡからⅢに引き下げたことで、収入がご利用者への処遇に支障があった。加算算定や安定した処遇を行ううえでも、余裕ある介護人材の確保をすすめなければならない。

<グループホーム金峰やすらぎ館>

- ・昨年と比べ若干であるが、入居率の向上が見られました。入居者の体調管理の徹底や危険防止に努めた結果だと思われまます。
- ・外部への活動も積極的に行い、他事業所と交流を図りながら地域貢献、情報発信としての役割ができつつあります。また、自治会においてもやすらぎ館の行基に来ていただいたり、地域の行事に参加したりとよい関係が保たれています。